

Bāzī (オオタカ) を謳う

— アラブ狩獵詩・断章 —

堀 内 勝

1. アラブ詩と詩人 Abu Nuwas

アラブ詩の伝統は30詩行以上で構成される長詩 *qaṣīdah* に代表され、維持発展されてきている。長詩であるから、その形式・内容に規まりを持ち、その内容構成において主題別に叙される。そしてプレイスラム期から始まる *qaṣīdah* の史的発展は、一つの内容を持った部分が長詩から独立して、ジャンル・詩型を形作ってもいた。

たとえば本稿で扱かう詩人 Abū Nuwās (イスラム暦130/西暦747~195/810頃)。彼の時代には未だ完全なジャンルとしては独立してはいなかったろうが、後世の詩の編纂者は8ジャンルに分類している。彼の詩作品の一篇一篇は、本稿のものがその典型のものであるが、それ程長いものではなく、作風を従って限定しながら、なおかつ十分展開でき、広いジャンルにわたってその才能も多岐にわたって発揮され得る結果となっている。彼の全作品のジャンルは以下のようなものである。1. *xamriyyāt* (酒ほがい詩), 2. *ġazal* (恋愛詩), 3. *madah* (頌詩), 4. *hijā'* (風刺詩), 5. *rithā'* (挽歌), 6. *'itāb* (悲歌), 7. *zuhd* (宗教歌), 8. *ṭard* (狩獵詩) である。彼の詩の特徴としては, *xamriyyah* (酒ほがい詩) と *ġazal* (恋愛詩) の領域が優れており、その詩才ののびやかさと叙述の奔放性が特に名高い。彼の残した詩作品は *diwān* (詩集) にまとめられ、ここで紹介する al-Bāzī (オオタカ) と題される詩も、その *diwān* から選んだものである。Beirūt 版 (Aḥmad 'Abd al - Muġīd al - Ghazālī 校訂) の650~651頁に記載されており、当然ながら 8. *ṭard* の分野の中に収められている。

作詩者 Abū Nuwās は本名を al-Ḥasan ibn Hānī' al-Ḥakamī と言い、アッバース朝初期の詩人である。今のイランのアクワーズで、アラブ人の父とペルシャ人の母との間で生まれている。この母親の血は彼の常に意識するところとなり、彼にイラン人の優越性、イラン至上主義を唱えるシュウビーヤ (shu'ūbiyyah) 運動の推進者となる。学問、教養を積むため、イラクのバスラへ、次いでクフマで学び、さらに遊牧民の間で純粹アラビア語を修得する。その後、王朝の首都バグダードに出て、宰相バルマキ家に知遇を得る。

この事実は本詩第10行目にバルマキ家のジャアファルを賛美している叙述からも明らかである。そしてこのバルマキ家を通して、時のカリフ、ハールーン・アッラシードにも認められ、その nadīm (酒宴の際の相伴者) となるのも許された。カリフ宰相とこの詩人との交友は巷間にもよく知られ、おしのびで夜間バグダードの町中を散策したり、市民の生活ぶりを視察するエピソードは千一夜物語の中にも登場するほどである。

2 詩 al-Bāzī (オオタカ), 原文, 和訳, 註釈

1. 1. lammā ra'aytu l-layla qad tašazzarā ⁽¹⁾

'annī wa- 'an ma 'rūfti ṣubḥin ⁽²⁾ 'asfarā ⁽³⁾

夜がそのとぼり上げるを

夢うつつに感じとれる折

明け方が朝待つ者にも

また私にも訪れ来たる

(1) tašazzarā とは「終ろうとする、終りに近づく」の義。šazara (嫌々

ながら、相手を横目で見る)が語根義であり、直義は「ゆっくりと行動を起こす」。本来ならば tašazzara。末尾の長母音化は律を――に合致させるための技法。

(2) ma'rūfi ṣubḥin の直訳は「朝の承知者」。ṣubḥ は早朝でも fajr (夜明け)と同義。朝の礼拝を行う時、及び断食をしている場合その始りの時である。即ち「昼の一日の開始時」である。ṣubḥ または fajr の前の時間帯が saḥr であって「夜明け前」に当たる。saḥr までの時間は「夜の時間帯の最後の部分」であり、断食をしている場合、この saḥr の時間帯までは食料を食べて良い。それ故、断食月の一ヶ月間、寝過ごして「夜明け」を迎えて一日を空腹で過ごさないようにと、saḥr の時間を町中触れ歩く役 musaḥḥarāti が設けられる地域も見られる。

(3) 'asfarā とは「白くなる、明るくなる、輝く」が原義。元来が〈色〉と関係した語で、「safar の色になる」で、safar とは「白」なのだが、夜に対して〈昼が持つ色〉から生ずる〈明るさを伴った〉色ということになる。末尾の長母音化も(1)で触れた律を合わせるための技法で、文法的には 'asfara。

一詩行目の直訳は「夜がゆっくり(終りの)行動を起こすのを私が見た折、(朝という)時が私から、また朝の承知者から明るくなった」。

1. 2. kasawtu kaffi dustubānan⁽¹⁾ muš 'arā

farwata sinjābin⁽²⁾ lu'āman 'awbarā

手に着用せしは皮手袋

ふさふさとした有毛のものぞ

灰色リス・シンジャープ製

毛^{ざわ}触り良く撓^{しな}やかに手になじむ

(1) dustubān : ペルシャ語で「手袋」。アラビア語では quffāz というが、わざわざペルシャ語の語を用いることにより、ハイカラ性を出した。タカ狩用の皮手袋は、現代ではアラビア半島北部では dasma , 南部では dass と言っている。皮手袋よりも簡便なものに筒状のマッフを手の先端に通す man-qalah があり、現今の湾岸諸国ではこちらの方がもっぱら使用されている。

(2) sinjāb : ネズミより大きく、トビネズミぐらいの大きさのリス。シリア、イラク北部からイラン・トルコ一帯に生息する。毛皮は非常に柔らかく、灰色種が最良と言われる。この毛皮で製せられた衣は最高級品の扱いを受ける。

第二詩行の直訳は「私は手袋として有毛のドゥストゥバーンを着用した。シンジャープの皮製、ぴったりと合い、柔毛をしたもの」。

1. 3 taqi banāna l - kaffi 'allā taxṣurā

wa ḡamzati (1) l - bāzī 'i ḡā mā ṭafarā (2)

厳寒^{きむさ}の折とて指先を

かじかまぬようと温かく守る

またタカの勢いよく舞い立つ時

爪^ちの破壊^か力^りに傷つかぬようと

(1) ḡamzah : 「何があってもしっかりと掴んで離さないこと」。ここでは、タカが飛び立つ寸前に、支えである人間の手をしっかりと掴んで、反動をつける。その折の握力は素手ならば皮膚を破られ、筋肉深くに食い入ってし

まう程である。素手ならば傷つくことは間違いない。

(2) ṭafarā : 「高い所へ飛躍する, 飛び上る」が原義。「一跳躍, 一飛び」のことは tafrah と言い, 壁とか垣根などの障害物を飛び越える想定がされており, その想定がない場合 waṭbah と同義とされる。従ってこの tafara には, 馬とか犬が動作主である。鳥が動作主で「飛立つ」の意味を実現するのは ṭarā'alā である。ṭarafā も律を合わせるため長母音化されている。ṭarafa であるところ。

第3節の直訳は「皮手袋(の皮)は掌の指先が冷たくなならないように保護し, パージー(オオタカ)が飛び立つ時その握りしめから(保護してくれよう)」。

ここではアラブ世界でも, タカ狩は寒い冬の時期が本番であることが分かる。またタカの力が指先まで感じられるのは, 降りて来る時よりも飛び立つ時であるという, クロート受けする記述もある。

1. 4 qasamtu fī - hi l - kaffa 'illa l - xinṣarā ⁽¹⁾

'a 'dattu lī-l-buġṭāni ⁽²⁾ ḥatfan mumqirā ⁽³⁾

タカを操^{サツ}る調教は既に終える

掌を用いて, 小指は除いてだが

ブガース鳥を襲わせては

首の骨折り死なせるようにとの

(1) xinṣarā : 元の形は xinṣar. xinṣir とも。手足の「小指」のこと。タカの調教に小指を使わないわけではない。例えば脚部に結える creance (繋ぎ紐) の先端は, 親指と人差指との間を通した後, 薬指と小指の間を抜け

させて、鳥の突然の飛行に対して、紐を抑えて、飛び去るのを防ぐ役をする。ここでは、薬指と小指を一指にした四指の皮手袋を用いており、その故に「小指を除いてだが」と叙している、と解しておきたい。

(2) buḡṡān : 複数形で単数は buḡāṡ。小型の灰色をしたハゲタカ的一种。動き、飛行が遅く、アラブでは最も下卑た、賤しいものとされ、「ブガースがタカになった」との言い回しは「賤しい身分の者が高位に昇ったこと、出世したこと」の意に用いられる。ここでは飛行の速くないことを利用して、「突込み」(タカ狩用の実戦)のための獲物の代りとして用いられる。

(3) mumqirā : < mumqir. 「首を打つ、首を折る」, これを maqara と言い、その使役形 amqara 「首を立たせる／折らせる」の能動分詞形が mumqir である。タカ類はその力強く、鋭い鉤爪で獲物をわし掴みにして、その心臓に爪を突き立てるか、首をへし折って殺す。隼類には嘴に鳥類の長い首を容易に折れるよう曲がりを持っている。

直訳：私はそのことの中に、小指を除いて掌を分け（て分担し）た。またブガース鳥達を（タカをして）首を折らしめて死なせるために用意をととのえた。

1. 5 'abraša₍₁₎ buṡnāna l - jināḡi 'aqmarā₍₂₎

'arqata₍₃₎ dāḡi - d - daffatayni₍₄₎ 'anmarā₍₅₎

我がオオタカ 色彩かなり

翼長くして 明るき羽毛

両翼の白き中に 黒羽をちらほら

斑点紋様を くっきりと帯びつ

(1) 'abraš : 基本的には「ブチ色の」の意味だが、馬や羊、ヤギなどの動物に頻出する「地色に対して、黒、灰、茶、白などの斑点紋様を持つ」ことを言う。白毛の中に灰色の斑点の出る馬、連銭芦毛も二色であるが 'abraš と称して良い類であろう。(5)も参照。

(2) 'aqmarā < 'aqmar 「月光のような青白き色の」が直義だが、動物の毛の場合は「少しくすんだ灰、黒色が混っている白色毛をした」のこと。タカの白さも後者の意味であろう。和語で馬毛を表わすものに「月毛」があるが、これは芦毛に赤味がかかった色が混ったものを言う。

(3) 'arqat : 「斑点を持った、ブチの」の意味だが、より具体的には「黒地に白斑の」または「白地に黒斑の」であり、<白黒>の色に限定されるのが普通の用いられ方である。

(4) daffatayni : daffah の双数・属格形。daffah とは janb と同義で、物事の「側面、傍、わき」を意味する。ここでは従って上半句の jināḥ と同じく「翼」を意味し、別の語として律を合わせるために用いた。

(5) 'anmarā < 'anmar : 「namir (豹) 色をした」が直義。地は何色でも構わないが斑点の色は黒色のものを言う。下半句の前半で「白色の中に黒羽」と叙述しているので、この語は冗長、ないしは強調表現ということになる。第5詩行の直訳「(我がオオタカは) ブチ色をしており、その翼は長め太めであり、全体の色は少し灰の混った白羽毛。白黒の斑は白い両翼にも見える。白地に黒点の斑の」。

第5詩行の直訳は「色が混じり合い、翼が長く、明るい色。白地に黒、両側が白く、白黒まだら」。

l. 6 ka - 'anna šidqay₍₁₎ - hi 'i ð ā tadawwarā₍₂₎

šudḡāni min 'ar'aratin tafattarā

その両の顎^{あご}の部位たるや

採食^{しほ}の断たれし折などには

恰かも山の頂^{たけ}きより

分枝^{わか}れたる二つの稜線^{りょうせん}の如^{ごと}

(1) šidqay : šidq の双数対格属格後続形。šidq とは、人間の類ならば「頬肉」の意だが、鳥類では「下嘴のつけ根の部分」つまり「顎から口元の部分」を言う。この部分は栄養状態が分かり、狩の直前で断食していると、ぜい肉が落ちており顎の骨の部分が見える。

(2) tadawwarā < tadawwara。単なる「空腹である jā'a, tajawwa'a」ではなく、程度がずっと激しく「飢えてもだえる」程の状態を言う。dawr とは「激しい飢え」なのだが、じっとしてはいられない程のもののこと。

第6詩行の直訳「彼の二つの顎部は恰かも、餓えの激しい時には、二つの曲がり山頂から分かれ出ているようだ」。

1. 7 ka'anna 'aynay - hi 'i ḏāmā 'a θ'arā

faṣṣāni ⁽¹⁾ qaddan min 'aqīqin ⁽²⁾ 'aḥmarā

その双つの眼^めは恰かも

感情が高揚する折などは

砕きしルビーの色の如^{ごと}

その瞳孔赤色に染まる

(1) faṣṣānī : faṣṣ の双数主格形。faṣṣ とは目の中の瞳孔。黒目のこと。ḥadaqah と同義。オオタカ類の瞳孔は、黄色から年をとると共に赤味を増す。このように昂奮すると目が充血して赤くなることもある。また黒い瞳孔であっても光線の当り具合によって、赤く見えることもある。

(2) ‘aqīq : 「紅玉髓・ルビー」 pl. ‘a‘iqqah。同じ赤色でも「めのう」の方は ‘aqīq yamānī (イエメン・ルビー) と称し、名前の如くイエメン産のが名高い。この詩行の直訳、「彼の両目は刺激を受けると、ルビーを砕いたような赤い瞳孔のようになる」。

1. 8 fī hāmātin ‘alyā’a tahdī minsarā⁽¹⁾
 — — ~ — / — — ~ — / — — ~ —

ka - ‘atfati l - jimi bi - kaffi ‘a’sara⁽²⁾

すくと高き^{こうべ}頭あげ
 中から^{くちばし}嘴突び出だす
 タカ^{ゆん}左手の掌に乗せれば
 乙文字の曲がりに似る

(1) minsarā < minsar : 先端の鋭く突がった猛禽類の「嘴」。普通の鳥類の「嘴」は minqār と言う。

(2) jīm : アラビア語アルファベットの五番目の文字。jīm だけでなく、続く二つのアルファベット ḥā’, xā’ もすべて同じ台を用いて子音明別点のみを異ならせる。即ち、𐤅, 𐤆, 𐤇であり、この意味では点(ヌクタ)を取らない ḥā’ (𐤅) が最適であるが、詩人はあえて最初の文字(𐤅)を選んだ。乙の字の先端の曲がり(〜)がタカの嘴に似ているという新たな発想である。

8 詩行の直訳，「高い頭の中に，嘴を導き入れる，（その嘴の様は）左手の掌に（据えたタカの姿形が）ジームの文字の曲がりのように（見える）。

1. 9 yaqūlu man fī - hā bi - 'aqlin fakkarā
law zāda - hā 'aynan ⁽¹⁾ 'ilā fā'in ⁽²⁾ wa - rā ⁽³⁾

この嘴の形 考えるに

機智ある人のかく言えり

先に加えて ε に似る

さらに 𐤀 ととも，また 𐤍 ととも

(1) ε：アラビア語アルファベット第18番目の文字。タカの独特の嘴の格好を，文字の形で捕えようとする発想。εはタカが右向きになり，一番上の部分が嘴を上に向けた部分と見立てての発想。

(2) 𐤀：アラビア語アルファベット第20番目の文字。右側が頭部，左側が突き出た嘴，と見立ててのことであろう。

(3) 𐤍：アラビア語アルファベット第10番目の文字。上例よりも余程図形としても分り易い嘴の形をしている。アルファベットの若い順から並べなかったのには，次詩行に見る如くの意図があった。

第9 詩行の直訳：「そ（の嘴と文字）について理性で考える人は言う，それに加えるならば ε，さらに 𐤀 𐤍 と」。

1. 10 fa - ttaṣalat bi - l - jīmi kānat ja'farā ⁽¹⁾

fa - tṭayru yalqā - hu midaqqan mudsirā

先の乙に これら繋げなば

ジャアファルの語を形成す

獲物をうち砕き突き刺す

これぞタカの武器なる！

(1) ja'faran < ja'far : 普通名詞としては「用水路, 水の流れ」, 「乳の出の良いラクダ」を意味するが, ここでは固有名詞であり, アッバース朝初期, 宰相を輩出し, その権勢をカリフと争う程であった大バルマキ家の一人 Ja'far ibn Yaḥyā al-Barmakī (d. 803 A. D.) のことである。第5代カリフ Hārūn ar-Rasīd (在位786~809)の宰相を勤めまたカリフの nadīm (酒の相伴者) にも選ばれ, またカリフの第二子 al-Ma'mūn (後の第7代カリフ・在位813~833) の侍講にもなった。さらにカリフの兄妹である al-'Abbāsah (d. 800頃) を妻として迎える程, そのつき合いは親密であった。その親しさ, 近さ故か, ジャアファルは突然カリフの命により805年殺され, バルマキ家は没落する。これが世に言う Barmacide feast (見かけ倒しの饗応) である。

作詩者アブー・ヌワースは, カリフ・ハールーンに仕え, その boon companion, すなわち nadīm であったから, 宰相であったジャアファルとも親しかった。ここでは権勢の旺んな頃のジャアファルを高位の気品に満ちた Bāzī (オオタカ) に見立てて, 賞揚したのである。

第10詩行の直訳: それらが文字 jīm と連結すると, ジャアファルとなる。タカの鳥はそれ(嘴)をつき砕く道具として, つき刺すものとして用立てる。

3. Bāzī の内容について

歌い出しは, 狩猟詩 tardiyyah の伝統に則って, 「狩の出立」を叙す。その際に一日の朝夕のどちらかが歌い込まれる。多くは早朝であるが, 眠た

さと狩出の楽しさとがこめられた内容である。いよいよ出立の狩用の衣を身につけ、さらにタカ狩の必需品であり、タカを手に据える皮手袋にまず視点をおく、2・3詩行にわたる皮手袋の記述は、恐らく詩人の自慢の持物であろうことが推察される。どの製品にも名産地、最高級材料があるもので、それが灰色リスの1種シンジャープである。当時の情報を伝える貴重な記述である。

第3詩行では、タカ狩の時期が何時かを語っている。アラブ世界でもまた、他の多くのタカ狩地域と同じく冬期が中心である。第4詩行では「突込み」と称される本番さながらの調教が既に完了していることが報される。日本ではハトやキジを相手に襲わせる訓練を行うが、当時はブガース鳥という小さなハゲタカの1種を用いた。これもまた貴重な情報である。現在では湾岸諸国ではハトが殆んどである。

第5詩行からタカの叙述に入る。オオタカの最大の特徴である白黒主体の、縞紋様と羽とが叙される。詩人の所有になるオオタカは白色の方が優るもの、きれいで優雅さをも備えたタカがほうふつとその姿を浮かばせる。調教のされる様は第6詩行でも述べられる。タカ狩の本番の頃のタカは、獲物を捕えるために最低限の食しか与えられない。体重が多過ぎたり、動きが鈍い場合には餌を断ってその調整を行なうこともある。従って、本番を迎えるタカはかなり痩身になっており、それが嘴や顎の周辺部にくっきりと出ることになる。

第7詩行ではタカの眼が叙される。タカの目はその鋭さで見る人間の側を魅了するが、詩人のタカは、ワカタカではなく、すでに成熟した年齢に達していることが、その目の色から判明する。オオタカは年齢が進むに従って黄色から橙色、そして赤色へと変化してゆく。ここでは「感情が高揚する時」赤い色に変わる、ということであるから、常時赤色ではないことから、老齢を迎えたタカではないことを表わしている。

第8詩行から最末第10詩行までは、あの鋭い嘴の叙述である。しかも珍

奇なことは、その嘴の形をアラビア文字の形象で比喻化し、その文字をつなぎ合わせると、己のパトロンとなっているバルマキ家の宰相ジャアファルとなる、というわけである。奇をてらった風もあるが、アラブ伝統の頌詩 *madah* の伝統を踏まえた詩作法である。

4. Bāzī の形式について

韻律について述べる。まず *qāfiyah* (押韻法) の方を述べると、各詩行の脚韻はすべて *rā* で統一されている。押韻文字 (*rawī*) は / *r* / であり、その後の長母音 / *ā* / を示す文字 *alif* は付け足りたされ、押韻文字とはみなされない。押韻文字の後の後置文字は *silah* と呼ばれ、「後に接続するもの、付け足されたもの」の意味である。押韻文字が母音をとっているか、欠けるかにより *muṭlaqah* と *muqayyadah* とに分類される。ここでは *r* の後に / *ā* / という長母音をとっているために、前者 *muṭlaqah* に入ることになる。

また *rawī* (押韻文字) の直前がどういう韻構成であるかにより、3 種に分類される。① *rawī* に直接長音節 (長母音ないし 2 重母音) で続く場合 (例えば *kitāb, ḍarāb*)、この押韻法は *murdafah* (相乗りされたもの) に分類される。② *rawī* に長音節が続くがその間に短音節 1 つが介在する場合 (例えば *mukātib, muḍārib*) 介在短音節は *dāxil* (介在者、ここでは *t, r*) と呼ばれ、この押韻法は *mu'assasah* (基石打ちされたもの) という。③ *rawī* の直前の 2 音節に長音節が欠如する場合、即ち、短音節 2 つが来る場合 (例えば、*kataba, ḍaraba*)、*mujarradah* (裸にされたもの) と命名されている。本詩の場合 *rawī* の直前は長音節 + 短音節となっているので、②の *mu'assasah* に分類される。また *rawī* の直前、それに直接かかる母音も統一されていなければならない。これは①、②、③とも共通しており、それぞれ用語を異にしている。② *mu'assasah* の場合は、*dāxil* (介在者) となる子音には付される母音ということになるが、その母音のことを *ishbā'*

(満足させるもの)という。本詩では ishbā' は母音 a である。10 詩行中、ishbā' が a でない所が 3 つある。第 3 詩行の上半、第 4 詩行の下半、第 10 詩行の下半であり、ishbā' は u, i, i であり、不統一となっている。ishbā' の不統一は、他のこれに相当する rawī 直前の母音、①のは ḥadhw, ③のは tawjih と言い、それらの不統一程 'ayb (見苦しい傷, 欠点) とはみなされない。

次に律格 ('iqā') について述べる。一詩行の律動は長長短長 / ——— / の歩脚で統一されている。これをアラブ韻律学では mustaf'ilun 歩脚という。歩脚 (taf'il には 8 種あり、5 文字 3 音節 2 種、7 文字 4 音節 4 種、7 文字 5 音節 2 種である。mustaf'ilun 歩脚は 7 文字 4 音節 4 種の中の 1 つであり、しかも代表的歩脚型式である。そして歩脚の内的構成はテント綱と称されるサバブ (sabab) とテント杭と称されるワティド (watid) とから成り、サバブの変更は許されるがワティドの変更は許されない。それはちょうど、テント綱は伸ばしたり、縮めたりして調節することはできるが、テント杭はしっかりと固定されていなければならないことと同じだと言うわけである。さもないとテント自体、成り立たない。こうした比喻から採用されたものである。

従って歩脚は核となるワティド 1 つまたはそれ以上から成るサバブとから成り、ワティドがどこに配されているか容易に分かるようになっており、それで歩脚型を見極めるわけである。mustaf'ilun の歩脚は前にサバブ 2 つ、後にワティドが配される構成である。すなわち、mustaf'ilun (———) の 'ilun (—) の部分がワティドであり、従ってこの部分は固定され変更は許されないが、前のサバブ 2 つは変更が可能である。この歩脚変更は zihāf と呼ばれ、「テント綱のゆるみ」の意味であるが、理論上 3 種の変更が考えられよう。① ~——, ② ~——, ③ ~——の 3 種である。

①は第 2 子音を消去することにより、すなわち mus を mu とすることにより成立する。この mutaf'ilan となる zihāf (歩脚変更) は xabn (着物

の丈を短かくすること)と呼ばれる。本詩中、第1詩行第3歩脚、2 : 1, 3 : 1, 3 : 4, 4 : 1, 5 : 1, 5 : 6, 6 : 1, 6 : 3, 6 : 6, 7 : 1, 8 : 4, 8 : 6, 9 : 1の13例が xabn となっている。

②の――は mustaf の第4子音 /f/ を消去することにより、即ち musta'ilun の形を作ることにより成立する。これを韻律学上の用語では tayy の zihaf と呼んでいる。tayy とは「紙を巻くこと、着物を折り畳むこと」を意味する。本詩でこの tayy が見られるのは第2詩行第4歩脚、3 : 6, 5 : 1, 5 : 4, 6 : 2, 6 : 5, 7 : 2, 8 : 2, 10 : 1, 10 : 5の10例である。

③の――は①と②との歩脚変更を行なうことである。即ち mustaf'ilun の母音を伴わない第2子音 /s/、第4子音 /f/ を消去して、muta'ilun となる歩脚変更である。この変更は xabl と言い、「不具にする、しびれさせる、狂わせる」の意味である。歩脚変更の中でも、理論上は可能だが、2重の変更となり、(これは zihāf muzdawaj とって、歩脚変更4種が存在する)、律動の調べを著るしく損ない、その意味からしても避けた方が良いとされている。本詩中にもこの xabl の例は1例も存在していない。

この歩脚型 mustaf'ilun ―――で全詩行を統一している詩型をラジャズ (Rajaz) といい、アラブ詩にみられる16種の律格型の1つである。本詩は半詩行が3歩脚で構成されているので trimeter ということになる。動的な律動型であるラジャズは狩猟詩に向いており、多くのこの分野の詩はラジャズ詩型をもっているものが多い。

本稿は'94年から始まったプロジェクト「狩猟・農牧文化の通文化的研究」の一環としてアラブのタカ匠文化追究を進める方向で著作されたものである。